鎌倉中期の京・鎌倉における漢籍受容者群

『管見抄』と『鳩嶺集』のあいだ

福島金治

Group of Recipients of Chinese Classics in Kyoto and Kamakura in the Mid Kamakura Period：Between Kankensho and Kyureishu

FUKUSHIMA Kaneharu

はじめに
❶『管見抄』と『鳩嶺集』の奥書と問題点
❷石清水八幡宮田中家と鎌倉
❸後嵯峨院侍医和気種成と実時本『斉民要術』
おわりに

【論文要旨】

鎌倉幕府の要人の漢籍受容は、北条時頼・実時らの漢籍志向の性格、清原・藤原南家らの儒者との関係、武家文庫の形成などについて研究されてきたが、当該期の公武関係からの検討は不十分だった。本稿では、実時撰ともされる『管見抄』を石清水八幡宮の良清編『鳩嶺集』を媒介に検討し、鎌倉と京都の漢籍受容者群の基盤が共通することを明らかにした。

『管見抄』は『白氏文集』の要文を抄出したもので永仁三(一二九五)年に「関東田中坊」で書写された。本稿では寺坊に「関東」をつける例に注目した。その結果、遣身院が京都下河原門跡、犬懸坊が日光山別当、大蔵が小河坊の鎌倉住坊の性格をもっており、「関東」を付した場は鎌倉外に拠点をもつ人物の鎌倉住坊に付された例が多いことを明らかにした。こうしたことから、田中坊は石清水八幡宮の鎌倉住坊の可能性があろう。

石清水八幡宮と鎌倉との関係は、別当宗清と六波羅探題北条重時の親密な関係が知られていたが、『鳩嶺集』は注目されてこなかった。同書には北条時頼らの願文等が含まれ、作者は菅原為長・藤原経範などである。両者やその子孫は鎌倉と緊密な関係にあった。鎌倉と京都の交流には『鳩嶺集』にあらわれる人物が介在していた。その顕著な例が実時本『斉民要術』である。底本は和気種成本で、種成の漢詩も『鳩嶺集』にある。種成は後嵯峨院の侍医で、藤原明範らと良清主催の漢詩のサロンを形成していた。実時による同書の収集は小侍所別当の職務などと関係していたとみられる。このことは実時が同書の校訂を『阿娑縛抄』の作者承澄や宗尊親王正室宰子の甥近衛家基の本で校訂している点から推察できる。『鳩嶺集』にみえる人脈は、『斉民要術』の伝来に濃厚にみられる。後嵯峨院とその子宗尊親王を媒介に形成された公武の安定的関係は、京都・鎌倉での漢籍の伝授と受容に共通する人的基盤を生み出したといえる。

【キーワード】『管見抄』、『鳩嶺集』、石清水八幡宮、金沢文庫、後嵯峨院

はじめに

漢籍はかつて人々の教養の核の一部をなしていた。本稿は、北条実時撰ともされる『管見抄』（内閣文庫・京都智積院所蔵）や石清水八幡宮の良清（一二五八～九九）編『鳩嶺集』を通して鎌倉中期の京都・鎌倉での漢籍受容者群を検出し、後嵯峨院政期の人的ネットワークについて検討する。『管見抄』は『白氏文集』の抄出本、『鳩嶺集』は石清水八幡宮に関わる表白・漢詩を抄出・編集したもので編集・奉納の態度は白居易を模範とした。『管見抄』は、平岡武雄氏が『白氏文集』の抄録本で祖本は金沢文庫本系、書写先の「田中坊」を鎌倉と推定し[1]、阿部隆一氏はその著者を清原教隆に傾倒した実時に比定した[2]。『管見抄』の抄出時期が清原教隆による実時への諸本伝授の時期と重なる点がその根拠だった。一方、太田次男氏は著者を実時とするには奥書が長文で他の実時本と違和感があり、著者は教隆と若干距離のある北条時頼をあげた[3]。太田氏は、その後、尊経閣文庫所蔵『白氏文集』の校勘書入にみえる「越抄」の本文が『管見抄』と極めて近いことから、「越抄」を『管見抄』の別名とし著者を実時（越後守）とした[4]。この見解は、高橋秀栄氏が『管見抄』巻一〇の朱筆識語の筆跡を称名寺僧円種に比定して強化された[5]。それでも奥書から感じられる違和感は解消されず、西岡芳文氏は、本文が円種筆ではない点から実時撰としても底本は金沢文庫本以外にある可能性を指摘した[6]。また、近年、宇都宮啓吾氏は智積院から内閣文庫本と一具になる『管見抄』を発見した[7]。その発見は京都・鎌倉の交流の再検討を求めているように思われる。

『鳩嶺集』には仁木なつみ氏の検討があり、抄出された詩二三五句中の五四句が石清水八幡宮の「当社三百詩」（一二七〇～一二八九年に興行）からの引用であること、詩文の作者は良清と同時代人の知己で、上位入集者は平安末期の藤原俊憲や鎌倉初期の藤原孝範・菅原為長を除くと鎌倉中後期の人物で、願文類は良清祖父の田中宗清編「宮寺縁事抄納筥目録」所収の願文と重なることを指摘した[8]。藤原孝範・菅原為長の関係者は実時らと緊密であるが、『鳩嶺集』には実時らに伝授した清原教隆はみえない[9]。また、実時書写本『斉民要術』には小川僧正承澄が介在したことを平雅行氏らが指摘しているが[10]、『斉民要術』の底本は後嵯峨院の侍医和気種成の本であり、種成も『鳩嶺集』にみえる。後嵯峨院とその子の将軍宗尊親王に連なる人脈が実時書写本にみえるのであり、両者を検討することで、鎌倉中期の京都・鎌倉での漢籍受容者群のすがたをより明確にできると思う。以下、検討していこう。

❶『管見抄』と『鳩嶺集』の奥書と問題点

『管見抄』の識語・奥書は以下のようなものである[11]。

「永仁三年（九冊目）六月十七日未刻、於関東田中坊馳筆了、於此日、十巻皆終篇功者也、墨点者無本、仍不加之也、以他本更可写之耳、」（十冊目）

「本云、

管見抄内此文集処者、自康元之初年初冬中旬、至正元之初暦初冬上旬七日、都盧三年終其功既畢、或公務之隙目、想而忘疲、或病患之中心、遊而不怠、遂抄七十巻合一十巻、古今之間、緇素之類抄出、此集雖多、其人皆為春花事抄出之、為秋実事不抄之、於今抄者、指帰異之、先抽治世之要、是依可補私務也、次採斉物之詞、是依可養己志也、後拾風月之章、是依可悦我目也、毎披見此集、以可助身上病、毎握翫此抄、以可休世上愁猗也、此抄其徳惟多、抑此抄一部十巻、誂清直講終朱墨点、彼真人累代高才之儒胤也、当世絶倫之名士也、世之所知也、人之所許也、然則此掌内珠為函中宝、莫出閫外而耳、

一交了、

永仁三　五　廿六、於関東田中坊書之、」

『管見抄』は永仁三（一二九五）年に「関東田中坊」で書写された。作者は、康元元（一二五六）年一〇月から正元元（一二五九）年一一月の三年間、「公務」をぬって『白氏文集』を抄出した。その間、本人は「病患之中心」にあった。編集態度は「治世之要」となる要文を抄出することにあり、「清直講」（清原教隆に比定）に朱墨点を付してもらったという[12]。作者が鎌倉の要人という点は動かない。そこで、当該期に病気で苦しんだ人物をみると、『吾妻鏡』には以下のような人物がみえる。

〔宗尊親王〕将軍家（「御悩」「赤班瘡」「赤痢病」、康元元年七月二〇日・八月二四日・九月一日、文応元年八月七日）、

〔時頼〕奥州禅門（「奥州禅門違例」、弘長元年五月一六日）、奥州禅門息女宇都宮七郎経綱妻卒去（「去々比流産、其後煩赤痢病」、康元元年六月二九日）、

〔北条政村〕相州（「赤班瘡」、康元元年九月一五日、「赤痢病」、康元元年一一月二二日）、

〔北条長時〕武州（「武州長時頓病辛苦」、文応元年一二月一六日）、六波羅大夫将監長時朝臣室（「重病」、康元元年七月六日）、武州室（「所労減気」、康元元年八月九日）、武蔵国司子息宮王（「聊病患」、正嘉元年一一月一二日）、

〔北条実時〕越後守室（「赤班瘡」、康元元年九月二八日、「妻室病悩」、文応元年三月二一日）、

〔その他〕民部大夫康連（「病痾危急」、康元元年九月三〇日）、伊勢次郎左衛門尉（「所労」、康元元年正月一〇日）、武州前刺史禅室後室禅尼（「依不食所労、逝去」、康元元年四月一〇日）、

赤痢等が流行し、長時・時頼は自身も病気。実時は妻が病気だが本人は軽微なようだ。これに対し、長時は「頓病辛苦」と深刻のようだ。長時は重時の子で重時から「六波羅殿御家訓」を与えられた。康元元（一二五六）年三月に六波羅探題から鎌倉に帰ると評定衆、一一月には執権となった[13]。越後守の官歴はないが考慮しておく必要はあろう。

田中坊については、①田中光泉寺、②『金沢文庫古文書』中の「田中」との関係が検討されてきた。①は西岡氏が指摘したもので、『白氏文集』の光泉寺切について古筆了伴『古筆名切書上』に「最明寺時頼朝臣光泉寺切ハ（中略）関東田中光泉寺伝来ニテ、中ニ金沢文庫ノ印二ツ有之候」とあることによる[14]。②は太田氏の指摘で、金沢貞顕宛て釼阿書状に「此梨花、田中に候木に候を、所望申候て、態令進之候」とあることによる（『金沢文庫古文書』一一五九）。釼阿は田中にあった梨の花を貞顕に贈った。このほか田中には、釼阿宛て貞顕書状に「故長井武庫（貞秀）之十三年、当今年候哉、三月にて候しと覚候、何日にて候しやらん、委細可承候、若御覚悟候はすは、田中殿なとに、内々被尋申候て、可承候、中書仏事は何処にてせられ候哉らん、又前々進入候心経百巻令進」と田中殿がみえる（『金沢文庫古文書』二二三）。貞顕は長井貞秀の十三回忌供養を称名寺の釼阿に依頼しており、田中殿は貞顕・釼阿と親しい長井氏所縁の人物だった[15]。「田中」が金沢氏・称名寺と関係深いことは動かないが、別の視点からの検討も必要だろう。

注目するのは、「関東田中坊」のように寺坊に「関東」をつけた表現である。『諸尊法目録』には以下のようにみえる（『金沢文庫古文書』識語一三一二、傍線は筆者）。

弘安八年二月九日、奉授悉上乗院宮了、

法務頼助

嘉元二年四月六日、於関東佐々目坊、悉奉授于宮了、

僧正益助

延慶三年六月十六日、於関東犬懸坊、悉奉授明忍上人了、

僧正益性

元亨四年六月廿七日、於武州六浦庄金沢称名寺、以下川原宮秘決、
授湛睿大法師了、
沙門釼阿

『諸尊法目録』は頼助から益助・益性・釼阿・湛睿へと伝授された。頼助は北条経時の子で佐々目遺身院住、益助は順徳天皇の孫で下河原門跡を継承した。益性は亀山院の皇子。釼阿は称名寺長老。『血脈類集記』によれば、益性は嘉元二（一三〇四）年に「関東遺身院別荘」で元瑜に西院流を伝授している[16]。「関東遺身院別荘」が右の「関東佐々目坊」である[17]。仁和寺西院流の伝法関係を詳細に記した『西院流伝法灌頂相承血脈鈔』をみると、「関東」を記す例は建治三（一二七七）年に能禅が公寛に伝授した際の「関東佐々目谷」に限られる[18]。遺身院は特別な場だった[19]。特に「別荘」とされる点が重要であろう。「関東犬懸坊」も寛元三（一二四五）年三月一六日に将軍藤原頼経が二所参詣にあたって訪れた際、「日光別当犬懸谷坊」とみえる（『吾妻鏡』）。犬懸坊も日光山別当の鎌倉別荘だった[20]。京都伝来の聖教にも「関東」を付す例があり、『悉曇私抄』には次のようにみえる（『東寺観智院金剛蔵聖教目録』、傍線は筆者）。

弘安八年乙酉八月十六日、於関東大御堂辺、値見澄春小河殿坊人卿律師写本之処
奥書云、
建治元年六月十九日、於小河御坊、以右本、書写了、是則明了房之
私抄也、大切事有之間、自御所下給写之畢、右言高徳者此小河殿御
事歟、　澄春云々、

大御堂は頼朝が父義朝の供養に建立した勝長寿院の別称で[21]、勝長寿院別当は鶴岡八幡宮の別当が兼務することもあった[22]。京都僧の下向があって「関東」が使用されたのだろう。右の小河坊に関連する素材には尊澄について『阿娑縛抄』の次の識語がある（『大日本仏教全書』三五巻一七頁、傍線は筆者）。

本云、
建長三年十月廿四日、於小河草了、
同五年三月三日、於関東大蔵谷書了、

尊澄は鎌倉の要人と親近で[23]、鎌倉に滞在して著作活動にはげんだ[24]。大蔵のことは、『阿娑縛抄』馬頭巻に「同（建長）五年八月十二日、於大蔵別荘書了」とあり、小河坊の鎌倉別荘の性格をもっていた（『大日本仏教全書』三八巻一三二三頁）。大蔵に関しては同所にあった大門寺にも「関東」を付した例があり、『請書領状抄』には次のようにみえる（『金沢文庫古文書』識語一三二、傍線は筆者）。

写本云、
建長七年六月下旬比、以北院御室御自筆本書写了、
定心

文永二年三月十八日、於関東大門寺書写了、
已灌頂権律師定融

高橋慎一朗氏によれば、大門寺は大倉幕府がおかれた一角の鎌倉市西御門字大門付近にあった寺院で、六波羅探題と関係深い御家人後藤氏一族の僧が多く止住し、醍醐寺の実賢等も住した寺院だった[25]。遺身院は京都下河原門跡、犬懸坊は日光山別当、大蔵は小河坊の鎌倉住坊の性格をもっていた。大門寺もこれに準じたものだろう。「関東」の使用例は鎌倉外の育ちの人が鎌倉の別荘・住坊で活動している時に使用されており、「関東田中坊」もその一例とみてよいのではなかろうか。

次に『鳩嶺集』をみよう。『鳩嶺集』は、永仁三（一二九五）年、石清水八幡宮の良清が同社の願文・詩文から要文を抄録・編集したもので、平安中期の大江朝綱から鎌倉後期の良清まで約一三〇人分を収録している[26]。序文は以下のようなものである（『石清水八幡宮史料叢書』五）。

帝城之坤、男山之麓、有一夏臙、聚以周詩、所仰者瑞籬之照鑒也、
約春禴秋嘗於春秋、所憑者鏡谷之感応也、致朝祈暮賽於朝暮、神瞻

之稟余慶、誠是類祖之芳績也、綱位之昇清班、豈非明時之嘉猷乎、
毎憶冥徳之掲焉、弥凝如在之潔信、内雖儼蘋蘩蘊藻之祭奠、外只染
煙霞風月之興味、是以、諷詠之人以之為形言之媒、文章之家以之為
悦目之玩、因茲、忝奉始　仙洞之御製、遍聚於神林之嘉什、不論親疎、
不謂尊卑、不弃長句短句、不漏五言七言、拾其麗章綜緝之、課此短
慮編次之、雖恥(イ)浅見寡聞之庸材、不堪神明法楽之懇棘、只由句以採
人、不由人以採句、譬猶求美玉於砂石之山、芟凡草於蘭室之苑、匪
啻翫詩上之文華、宜伝于向後之末葉、昔白太保之帰仏乗也、納篇什
於(ロ)香山之石楼、今朱愚僧之仕神道也、貢詩句於蘗祠之廟壇也、彼者
為飜世俗文字之業也、此者為結(ハ)和光同塵之御結縁也、古今雖異、旨
帰足比、于時鳳暦永仁三歳之
聖代、鶯節芳菲二月之麗辰、石清水八幡宮権別当法印大和尚位良清
聊以序之、

裏書をみると、イに「史記曰、難浅(雖カ)見寡聞之者道」、ロに「白居易以文集納香山事」、ハに「御託宣、和光同塵結縁初」とあり、白居易等の漢文が織り込まれている。編集の趣旨は、詩文の選択には院以下の作者を八幡宮との親疎や身分の尊卑に顧慮することなく収めたこと、文集を八幡宮にささげる行為は白居易が香山寺に自身の詩文集をささげたことになぞらえたとある。『鳩嶺集』には時頼・実時周辺の人物の願文類がみえる。鎌倉関係者の文章の出典・作者・頻度（「鳩注」は『鳩嶺集』の注記）を示すと以下のようである。

①平時頼大般若供養願文〔作者可尋、大蔵卿菅原朝臣「為長卿」〕（2、〔鳩注〕時頼「関東相模入道」）
②平義宗一切経供養願文〔式部大輔藤原朝臣「茂範卿」〕（〔鳩注〕平義宗「関東駿河守」）
③源義氏朝臣大般若経供養願文〔作者可尋〕（〔鳩注〕義氏「関東足利」）
④大江泰秀大般若供養願文〔大蔵卿菅原朝臣「為長卿」〕（2、〔鳩注〕大江泰秀「関東長井」）
⑤平盛綱経供養願文〔式部大輔藤原朝臣「経範卿」〕（〔鳩注〕盛綱「関東平左衛門尉」）
⑥明忍法師大般若供養願文〔大蔵卿菅原朝臣「為長卿」〕（2）

平時頼は北条時頼（一二二七～六三）で執権。平義宗は北条義宗（一二五三～七七）で執権長時の子、六波羅探題。源義氏は足利義氏（一一八九～一二五四）。大江泰秀は長井泰秀で評定衆。平盛綱は侍所所司で北条氏家令、一二五〇年以前の死去とされる(27)。明忍法師は称名寺長老釼阿（一二六一～一三三八）も「明忍房」だが、同一人物かは不明。今後の検討を必要とするが、念のためあげておいた。『徒然草』には時頼が鶴岡八幡宮の社参のおりに義氏邸を個人的に尋ねたことがみえ（『徒然草』二一六段）、彼らの人間関係は緊密なものだった。

次に右の願文の作者をみよう。菅原為長は北条政子に「仮名貞観政要」を伝授したように鎌倉と関係が深く(28)、為長の孫観証は実時の後見だった（『関東往還記』）。藤原経範は後嵯峨院の侍読、経範の子茂範は将軍宗尊親王の侍読だった(29)。こうした背景もあろうか、金沢称名寺伝来の『明儒願文集』（湛睿手沢本）は日野資実と菅原為長の作成した願文である(30)。

石清水八幡宮と鎌倉は律僧を媒介にしての交流も深い。石清水八幡宮の律院善法寺のことは称名寺伝来『憲芥抄』に以下のようにみえる（神奈川県史一八三四）。

本云、
永永(文カ)七年九月四日、於善法寺無常院、奉伝授之了、鎌倉下向故、由
慇懃所望、感得此大事了、　金剛仏子証円生年廿二
正応六年春比、此書伝写之了、　円智生年五十九
応長元年九月廿七日、於多宝寺、以円智御本書了、

文永七（一二七〇）年、証円は善法寺無常院で伝授された聖教を鎌倉下向に際して持参した。その後、正応六（一二九三）年に円智がこれを書

写し、応長元（一三一一）年に多宝寺で書写された。扇谷の多宝寺は極楽寺長老となる忍性・順忍が住持した寺院だった(31)。この他、称名寺長老釼阿の『宝寿抄』巻一〇の識語にも石清水八幡宮との関係がみえる(32)。

①広沢灌頂　永仁三年三月廿八日、八幡志水唯心上人忌日、広沢許可、
　同廿一日、大師御影供、三宝院許可、
②四月三日マテ灌頂伝授畢、

『宝寿抄』は、石清水八幡宮の志水に住した唯心から禅意・真源へと伝授された事相書である。唯心は『鳩嶺集』に二件検出でき、その裏書に「境内住志水辺、真言宗」とある(33)。唯心の教学は関東に広がっていて、釼阿らはその法を継承していた。

以上の検討から、「関東田中坊」は鎌倉外の寺院等の鎌倉別荘の可能性が強いことを指摘した。また、『鳩嶺集』収録願文・表白の作者・願主には時頼等と親近な人物がみられ、彼らは『管見抄』の作者や周辺の人びとと近い関係にあることを確認できた。こうしたことからみて、「関東田中坊」は石清水八幡宮田中家の関東住坊である可能性があろう。

❷石清水八幡宮田中家と鎌倉

石清水八幡宮別当宗清が六波羅探題北条重時と親密だったことは、黒田俊雄氏が山城国薪荘の紛争解決を述べるなかで指摘している(34)。嘉禎二（一二三六）年正月一二日、宗清が重時と面談した際の記録には、「出京、先向六波羅駿河国司（北条重時）許、対面、談種々之子細、日高成間、不向於亮亭（北条時盛）、以後藤治兵衛尉、忩参殿下候間、不参之由、可申旨示遣訖」とあり、探題南方時盛との予定をつぶしてまで対談を行なっている（『大日本古文書』石清水文書一、九四頁）。また、『石清水八幡宮祠官系図』には宗清の子教清について以下のような記載がある（『続群書類従』七上）。

教清始亮一、後改教一、母同、法眼、法印、文暦二年八月十四日補修理別当、嘉禎三年四月廿五日、転権別当、宝治二年、被召下関東、被配国、異本、権上座、寺少別当、修理□□、箱根検校、出家七歳、貞応元年十一月八日、天台受戒、異本、放生大会之日、於常磐鷹逍遙、鳩ヲ嗾テ、第三神輿落懸ル、依此科、関東ヘ被召下之、被囚閉、折節焼失、公武騒動、大唱立、乗輿、走者之馳違砌、件教清令馬飛、被蕩此儀、暫許容之云々、又依悪行更発、終夭亡、異本、号悪権別当、

教清の初名は亮清、兄弟の章清・行清と同じく母は祐清の女だった（『石清水八幡宮祠官系図』）。その経歴は、文暦二（一二三五）年に修理別当、嘉禎三（一二三七）年に権別当と順当だったが、宝治二（一二四八）年に関東に追放され、さらに所管の国に流されたとある。右の経歴のうち、嘉禎三年四月の権別当就任に関連するものには、翌五月に作成された①検校宗清処分状（前欠）（石清水文書、鎌倉遺文五一四〇）と②検校宗清袖判譲状がある（石清水文書、鎌倉遺文五一四二）。①は兄弟子息や女房への所領配分で、文中には「一　女房分（教清・行清等母）／　山本庄（於勅事院事、元期之後、可付本可勤之、一所教清、」とあって、教清と行清は同母兄弟で、一期の後は教清に付けるとある。教清は嫡子のはずだった。このことに関して、宗清は「但教清成人以前、可継跡之子息未出来之間、若有不慮事者、行清如教清併可惣領之、行清又成人之以前、可継跡之子息未出来之間、若有不慮事者、教清如行清可領知之、凡教清与行清成一味同心之思、或世間、或所領、付諸事無向背之儀、可致和与沙汰」と言い置いている。教清が成人するまでの間は、行清が惣領としての立場にあるというものだった。②は宗清が行清に与えた笛などの目録からなる。宗清は、石清水八幡宮の由緒をまとめた『宮寺縁事抄』について「権別当借之時者早可借之、本日記者譲渡権別当畢、修理別当借之時者同可借之、相互莫借之而已」と記している。『宮寺縁事抄』は教清に譲渡したが、お互いに貸借するよう言い含めている。行清の子が先述した良清である。宗清は教清を嫡子とし

つつ、行清も同格に近い立場を与えていた。

教清の処分は、宝治三（一二四九）年三月の後嵯峨上皇院宣にみえる[35]（尊経閣文庫古蹟文徴、鎌倉遺文七〇四四）。

故宗清法印所帯雖譲教清法印、惣処分状載将来之子細歟、而今教清依悪行、被処于罪科之間、筥崎宮事、改彼執務、已被補検校了、自余之所領等、且任先師之遺状、同可被領掌者、

院宣如此、仍以執達如件、

宝治三年二月一日　　権中納言藤（花押）（定嗣）

田中権別当（行清）法印御房

宗清は教清に所領を譲渡したが、教清の「悪行」が発覚したために箱崎宮検校の職を解いた。その職には、宝治三年正月一九日に行清が補任されており、右の記述と合致している（『石清水八幡宮祠官系図』、『続群書類従』七上）。教清追放に関わる内容は系図では二つの事件が関係しようか。一つめは、放生会の日に鷹があらわれて鳩を襲い鳩が第三の神輿に落ちたという事件である。この罪で、教清は鎌倉に召し下され幽閉されたという。また、この事件では、建物が焼失して「公武」の騒動となった際、教清は馬をとばしてかけつけて許されたともいう。二つめは「悪行」のために「夭亡」したという。一つめの事件は、石清水八幡宮の放生会が国家の直接運営だったため、行事での失態をとがめられたと考えられる[36]。二つめの「悪行」の内容は具体的に記されていないが、これが処分と関わっていよう。

宗清の処分があった嘉禎三年から教清が追放される宝治三年にいたるこの時期、別当は壇棟清・善法寺宝清・竹耀清・善法寺宮清と移り、宮清の後は行清が継承する（『石清水八幡宮祠官系図』、『続群書類従』七上）。右の事情から、黒田氏は石清水八幡宮は門閥の集合体で、宗清から行清までの期間の別当は田中家ではなく高野検校成清系だったとし[37]、伊藤清郎氏は鎌倉期初頭には田中・善法寺両家から別当を選補する体制が確立していたとされた[38]。田中行清の別当就任は社内での田中家の巻き返しがあってのことで、教清の処分には幕府・朝廷に共通した問題があったと推察され、田中家領周防国得善保の伝領問題が関わろうか。『葉黄記』寛元五（一二四七）年正月二六日条にみえる公卿定文には、議題の一つに「一、八幡権別当教清与右衛門尉盛範相論周防国得善保事」とあり、教清と盛範の相論を国司に聞くこととした（鎌倉遺文六七九五）。その後、建長二（一二五〇）年八月の関東御教書で得善保地頭職を別当行清に引き渡すこととし（鎌倉遺文七二二八）、同年一一月の後嵯峨上皇院宣で国司の妨害を排除することを認めた（鎌倉遺文七二四二）。教清はこの相論で処分され、幕府と後嵯峨院が連携して問題を解決した。

当時、将軍には寛元二（一二四四）年に六歳の藤原頼嗣がつき、執権には同四年に時頼がついた。頼嗣の父頼経は大殿として地位を確保していた。時頼は、同四年に名越光時らを伊豆に流し、翌宝治元（一二四七）年の宝治合戦で三浦泰村らを排除し、頼経の勢力をそいだ。地位を安定させた時頼は、建長二（一二五〇）年二月二六日、頼嗣の文武稽古の開始を命じた。清原教隆が漢文の指導役で、御家人の子息で好学の者を頼嗣の側近くに祗候させた。さらに三月一日には造閑院造営の役分担を決めた（以上、『吾妻鏡』）。幕府は頼嗣の監視を強化する一方、朝廷との連携を強化していった[39]。頼経を追放して皇族将軍を迎えるにいたる幕府の方向性と、後嵯峨・西園寺勢力が北条氏と結んでいく流れを確認できる[40]。

教清の追放と処分は、後嵯峨院政が開始され、九条家の勢力が鎌倉から減退する時期におきていた。石清水八幡宮領薪荘と春日社領大住荘の紛争の経過をみると、特定の人物と別当田中宗清らとの親密な現象がみえる。嘉禎二（一二三六）年二月二八日の摂政藤原道家告文案は別当宗清が薪園に使者を派遣した際に聴取した結果を述べたものだが、作者は文章博士藤原経範（石清水文書、鎌倉遺文四九三四）。同年三月二〇日

の法印宗清告文の文章作成は、作者が同じく経範、清書は右京大夫藤原行能だった（石清水文書、鎌倉遺文四九四八）。南家儒者の藤原経範と書家の世尊寺行能がセットであらわれ、石清水八幡宮を援護していた。行能は寛喜四（一二三二）年に宗清の求めで石清水八幡宮の建立・遷座の縁起を書いている（『大日本古文書』石清水文書一、四五他）。経範の子茂範は、やがて後嵯峨院の子宗尊親王の侍読として鎌倉に下向する。世尊寺行能・経朝は安達泰盛の師匠としても知られる。後嵯峨天皇の擁立に関与した安達義景や北条重時・実時ら関連の人物が影のようにあらわれいる。

話題を変えて、当時の京都・鎌倉の人々の漢文教養の形成のありかたを、田中宗清と教清・行清の事例と金沢称名寺の釼阿周辺の事例と比較してみよう。『宮寺縁事抄』紙背文書には次の田中宗清書状・某勘返状がある（『大日本古文書』石清水文書一・五九六頁、鎌倉遺文四五一六）。

「悦承候了、夜陰必可参入候、」

此間在京候、必々可参入候也、

「如此幼学書、耄及病重、皆忘却候、委□点（　）一本を相具、可被渡候、合点可有□候也、以上、」

八歳小法師教清今嫡弟楽府朗詠を可読之由存候、仍相□（付カ）候僧一人を可召進之由、存候也、令申治部殿給候て、訓御□（伝カ）授候乎、随御返事、明日可召進□（候）、恐惶謹言、

七月廿九日　　宗清

宗清は少年教清が『楽府朗詠』の学習をはじめるので親しい僧を教授役に送ってほしいと言っている。『楽府朗詠』を「幼学書」といい、点を打ったものを贈っていただけるとこれに合点を加えると返事している[41]。翌三〇日の宗清書状には「教清ニ付候法師、随身楽府朗詠参上候」と早速の配慮を喜び、こうした行為は「為思子候之習」と言っている（『大日本古文書』石清水文書一・五九七頁）。教授法は、もう一通の宗清書状に「楽府朗詠事、楽府ニハ御訓ニハ朱ニて御合点可給候、朗詠ハ只押て記送点也」とある（『大日本古文書』石清水文書一・五九七頁）。『楽府』の学習が入門教育だったこと、教授方法は朱合点を打って行ったことがわかる[42]。この方法は関東でもよく似ていて、弘安一〇（一二八七）年ころの千等書状に以下のようにみえる（金沢文庫保管釈摩訶衍論私消文裏文書、鎌倉遺文一六二九七）。

楽府之料帋、□相具〔　〕て、〔　〕字是〔　　〕者、一不〔　〕以御〔　　〕いそき被□□ましく、猶々か様に被御心入候之条、返々悦入〔　〕見参之時□の御本返まいらさせ給て候やらん、未其に候ハ、時程、可借給候、恐々謹言、

四月〔　〕　　千等

「御返事（ウワ書）　　千等（花押）」

千等書状は釼阿の『釈摩訶衍論私消文』紙背文書で、他の書状も釼阿宛てが多い。本書状も釼阿宛てとみてよかろう。千等は「楽府」の書写を行っていて、釼阿へ借用を申し出たものとみられる。「楽府」は鎌倉でも漢文の教養形成に使用されるテキストだった。

右にみた事情から、石清水八幡宮が後嵯峨院政期に朝廷・鎌倉幕府と密接な関係をもっていたこと、京都・鎌倉の漢文教育は共通の基盤があったことが明らかにできた。

❸後嵯峨院侍医和気種成と実時本『斉民要術』

『鳩嶺集』にみえる漢詩等の作者で、実時本と直接に関わるのは和気種成である。種成と石清水八幡宮との関係は次のようなものからうかがえる。

早夏言志

正三位藤原朝臣明範卿

仙遊送日第三洞　余興留春花一庭

和気種成朝臣
紫蕉衫薄偏宜夏　紅杏錦残未忘春
法印良清
林間猶有鶯余弄　春後纔残花一枝

初夏、良清は藤原明範・和気種成とともに石清水八幡宮の境内で漢詩を詠む会を催していたようだ。種成の参加した例は、「冬夜言志」に高階邦泰と、「連句」の「秋」に良清・「院御製」・藤原基長・藤原明範・菅原尚在・尊真上人とならぶ。「院御製」は後嵯峨院をさそう。尊真上人は藤原基長の子で長弁の師であると仁木氏が指摘している[43]。血縁的にも親近な人々が加わっていた。種成は、『問はず語り』によると文永九（一二七二）年正月末の後嵯峨院の嵯峨御幸に際して「みちにてまゐるべき御煎じ物を、種成・師成二人して、御前にて御みづがめ二つに、したため入れて、経任、北面の下らふ信友におほせて持たせられたるを、内野にて、まゐらせむとするに、二つながら露ばかりもなし」とあり、重病の後嵯峨院の行幸に同道しており[44]、「和気氏系図」には「侍医」とある[45]。この事情からみて、石清水八幡宮での漢詩会に参加した面々は、後嵯峨院の側近くに仕えた人々だろう。種成と良清との関係は、後嵯峨院の度々の石清水参詣のなかでつくられたのだろう。

種成は、蔵書だった尊経閣文庫所蔵『黄帝内経』明堂巻第一・太素巻第十九の文永年間の奥書から、医書を書写・収集するとともに家説を伝授していたことがわかる[46]。種成は実時本『斉民要術』の奥書にもみえる。『斉民要術』は、後魏（三八六～五三四）の賈思勰撰の農書である[47]。医学書収集の延長上で収書したのだろう。日本への伝来は古く九世紀末の『日本国見在書目録』にみえ、高山寺には宋版が伝来している[48]。一方、実時本（現、蓬左文庫所蔵）は一〇巻で各巻に奥書がある（『神奈川県史　資料編　古代・中世（1）』七一〇）。巻一の奥書は次のようなものである。実時自筆部分は「　」を付しておいた[49]。

「書写点校之子細記第十巻奥了」（第一巻）、
本云、
宝治二年戊申九月十七日、康楽寺僧正譲賜之、
典薬権助和気種成在判
仁安元年十月六日、於東坂本河原口坊、以唐摺本書写了、
一校了、
同七日、又校了、
「建治二年正月十五日、以近衛羽林借賜之摺本校合了、」

冒頭に「書写の事情は第一〇巻の奥にある」と記す。このことは第四巻にもみえるが、初巻と最後の巻に注記することで書写の契機を明確にしたのだろう。第一〇巻の奥書は以下のとおりである。実時自筆部分は同様に「　」を付しておいた[50]。

本云、（第一〇巻）
宝治二年戊申九月十七日辛酉、自康楽寺僧正所譲賜也、
薬権助和気在判
仁安元年九月晦、於百斉寺、以唐本摺本書了、
仁安元年、一校了、同十月七日、又校了、
「此書一部十巻、小川僧正御房、自京都令借下本給之間、書写校合了、于時文永十一年三月十一日　越州刺史（北条実時）（花押）」

実時が小川僧正承澄本を利用したことは平雅行氏らが指摘している[51]。まず、種成本の成立過程と実時の校訂事情から検討しておこう。

祖本は平安末期に作られた。仁安元（一一六六）年の識語から書写の経過をみよう。巻九には九月二八日の「午時書」とあり、書写の開始を示そう。同日に巻四、二九日に巻五も校正、晦日には巻一〇を「百斉寺」で「唐本摺本」から書写した。一〇月二日には巻七を校正して再校、三日に巻八、五日に巻六・九を校正した。五日には巻五・六・八の再校もした。六日には巻一に「東坂本河原口坊」で「唐摺本」から書写したと記し、

巻一・二・四も校正し、七日に巻一・四・一〇の再校し完了した。一〇日間ほどを費やし、書写の場は「百斉寺」「東坂本河原口坊」だった。「百斉寺」は近江国百済寺だろう。「東坂本」も比叡山の麓に「坂本」があるから、天台寺院での書写だろう。原本は「唐本摺本」「唐摺本」とみえ中国刊行の版本だった。『斉民要術』の版本は、北宋の天禧四（一〇二〇）年刊行本と天聖年間（一〇二三～三二）刊行本、南宋の紹興一四（一一四四）年刊行本が知られており[52]、こうした版本類が底本とみられる。

この本は、宝治二（一二四八）年九月一七日に「康楽寺僧正」から和気種成に与えられた。どの巻にも同じ識語がある。一括して贈られたものだった。康楽寺のことは『門葉記』にみえる。天台座主慈円について、承久元（一二一九）年八月二六日には「為同（一院）御祈、於康楽寺房、被修尊勝法」とみえ、慈円はここで後鳥羽上皇のため祈祷した。また、翌年八月二七日には「関東若公」（三寅、九条頼経）の祈祷を同寺で修しており、慈円が住した寺院だった（以上、『大日本史料』四－一五）。この他に天台僧光宗の『渓嵐拾葉集』に「葉上流之康楽寺慈胤法印」「康楽寺慈賢僧正」ともある（『大正新修大蔵経』続諸宗部）。松田宣史氏の研究を参照すると、康楽寺は神楽岡にあった慈円以来の住坊、この時期の「康楽寺僧正」には慈胤が対応する[53]。種成本は慈胤の所持本を譲渡されたものだった。

実時は、文永一一（一二七四）年三月一一日に「小川僧正御房」に依頼して借用した本で書写し（巻一〇奥書）、建治二（一二七六）年正月一五日に「近衛羽林」から借用した「摺本」で校正した（巻一奥書）。「小川僧正御房」が種成本を実時に媒介した人物、「近衛羽林」は校訂用の「摺本」を実時に提供した人物となる。右の事情について、平氏は「蓬左文庫『斉民要術』は承澄が京都で借り受けて、金沢実時が書写させたもの」とされた[54]。小川僧正は承澄だが、「京都で借り受けて」という判断はいかがだろうか。承澄は台密における百科全書のような『阿娑縛抄』を編纂した[55]。その編纂は京都が中心だが、建長二（一二五〇）年から同八年にかけては鎌倉の二階堂・永福寺等で行っている[56]。気になるのは『阿娑縛抄』の次の識語である[57]（『大正新修大蔵経』図像第八・九巻）。

御本云、（降二世巻）
建治元年九月十二日、草書、近年於関東依無具書不草、終上洛之後、於小川悉披具書抄入了、　求法比丘僧正承澄
去文永十年二月十六日、京都本不具之間、為満足書写之本数紙不具之体也、仍書改之者也、（通法要巻）
建治二年九月九日　承澄

建治元（一二七五）年九月の識語から、承澄は京都でこの識語を書いたことがわかるが、近年関東では具書がそろわず上洛したという[58]。それ以前は関東にいた。文永一〇（一二七三）年の識語では、京都の本がそろわないので書写が満足にいかないといっている。この時は、京都を離れていたとみられる。実時が『斉民要術』を校訂したのは文永一一年三月一一日であり、承澄の鎌倉滞在中と重なる。実時は鎌倉で借りたとみてよい。

「近衛羽林」は誰だろう。該当しそうなのは惟康親王と近衛家基である。惟康親王は文永七（一二七〇）年七月に左近衛中将（『武家年代記』等）、近衛家基は建治二年当時に右大将である（『公卿補任』）。将軍の場合は敬称をつけるだろうから、「近衛」を家名とみて家基と思われる。家基は父基平が文永五年に没して家を継承した。叔母は将軍宗尊親王の室宰子で、この時期の将軍惟康親王の母である（『尊卑分脈』）。宰子は文応元（一二六〇）年二月五日に北条時頼の猶子として鎌倉に下向して宗尊親王の御息所となった（『吾妻鏡』）。山本みなみ氏は、宰子の宗尊親王との婚姻について、得宗時頼が猶子とした後に婚姻したことで北条得宗家の家格を上昇させ将軍家と得宗家の一体化を図ったと評価された[59]。やがて僧良基との密通事件がおこると、文永三年六月一九日、北条時

宗・実時・安達泰盛らは宗尊親王追放の寄合を開き、翌日、宰子と姫宮は山内邸へ、若宮（惟康親王）は時宗邸に入った。その後、七月四日に宗尊親王が帰洛したが、宰子は同行していない（『吾妻鏡』）。七月二四日に惟康親王が新将軍となると、一一月二日に宰子と姫宮も帰洛した（『鎌倉年代記裏書』）。この間、実時は将軍御所の管理にあたる小侍所の別当などを経歴していた。実時と近衛家の交流は宗尊親王帰洛後もつづいていたこととなる。

まとめておこう。実時本『斉民要術』の底本は、天台僧慈胤が相伝した本で後嵯峨院の侍医和気種成に与えられたものだった。その祖本は中国の版本だった[60]。実時はこれを承澄を通して借用して書写し、近衛家基から借覧した本で校訂した。伝書に関わった人物には後嵯峨院と宗尊親王の周辺人物が濃密にみられる[61]。実時の漢籍の受容は、後嵯峨院と北条氏との安定した関係があって行われたものだった。

おわりに

金沢文庫本の研究は、関靖著『金沢文庫の研究』をはじめ多くの研究が積み重ねられてきた。その内容は、①金沢文庫本の確認と伝来、②金沢文庫と称名寺の関係および「金沢文庫」印の問題、③金沢氏当主らへの清原氏などからの学問の教授と受容、④金沢氏一族女性らの草子類の受容など多岐にわたるが[62]、政治史との関連で検討する点が不十分だったように思う。本稿では、『管見抄』や田中良清編『鳩嶺集』を素材に当時の漢籍受容者群を後嵯峨院・宗尊親王周辺との関係で検討した。

『管見抄』の未解決の問題は、奥書にみえる「関東田中坊」の性格だった。本稿では「関東」を付ける表現が鎌倉以外に拠点のある寺社の鎌倉別邸の要素をもっていたことを指摘した。さらに、『管見抄』の伝来とほど近い時期に『白氏文集』の影響をうけた石清水八幡宮の良清編『鳩嶺集』をみると、収録された願文類の願主や作者に時頼・実時と関わる人脈がつらなっていることを確認できた。この二つのことがらから考えると、「関東田中坊」には石清水八幡宮の田中家との関係が想定される[63]。京都から鎌倉への漢籍の伝授の背景には、後嵯峨院・宗尊親王と実時らの人脈がつながっている様相がうかがえた。また、こうした背景には、田中教清の初期教育や鎌倉での漢籍の学習が『楽府』などを通じて行われたように、漢文の教育が共通した書を基盤にしていたことも述べた[64]。

最後に後嵯峨院と鎌倉との接点を考える素材として実時本『斉民要術』の書写過程を検討した。その底本は天台僧慈胤の本で、後嵯峨院の侍医和気種成に譲られ、これを実時は天台僧承澄から提供されて書写し、近衛家基から借覧した本で校訂していた。『斉民要術』の伝来には『鳩嶺集』にみられる人脈がつらなっており、『管見抄』の編者と周囲には『鳩嶺集』にみえる人びととの交流が措定できるのである。宗尊親王の下向とあわせて鎌倉への京都からの人材流入等について指摘はすでにあるが[65]、石清水八幡宮等を媒介にしての漢籍受容にも後嵯峨院・宗尊親王をめぐる関係が濃厚に付着していたといってよかろう。

註

（1）「白氏文集の金沢文庫本・林家校本・宗性要文抄本について」（『神田博士還暦記念書誌学論集』、一九五七年）

（2）「北条実時の修学の精神」（『金沢文庫研究』一四七、一九六八年）。佐藤進一氏は、『白氏文集』の幕閣への影響について、中原政連が北条貞時を諫めた『平政連諫草』の過差の停止を求めた一条に『白氏文集』の「驪宮高し。人の財力を重惜するを美む。牡丹の芳、天子の農を憂うるを美む」の一節が引かれていることを指摘している（『平政連諫草』、佐藤進一・網野義彦・笠松宏至『日本中世史を見直す』、一九九四年）。『白氏文集』を為政の書として学ぶ姿勢は『管見抄』だけではなかった。

（3）「内閣文庫蔵『管見抄』について」（『斯道文庫論集』九、一九七一年）

（4）「内閣文庫所蔵管見抄と『越抄』について」（『金沢文庫研究』一九九、一九七二年）

（5）神奈川県立金沢文庫編『よみがえる中世』（一九九〇年）

（6）「金沢文庫と白氏文集」（『白居易研究講座』第四巻、一九九四年）

（7）「資料紹介：智積院新文庫蔵『管見抄』（断簡）について」（『白居易研究年報』一〇、二〇〇九年）。収集者は一五世紀後半～一六世紀半ばの根来寺の亮盛周辺とされた。

（8）「『鳩嶺集』出典考」（『文芸論叢』〔大谷大学〕六六、二〇〇六年）

（9）田中宗清が清原家の家学をうけていたことは、（ア）『太神宮与熊野山同体否事諸家之勘文』の奥書に「建□□（保二カ）十□日□直講清原本也、／　法印（宗清）（花押）／　以高倉博士判官（斉親）本、公卿申状書入了」（『田中家文書目録』一、桐八－①）、（イ）『類聚国史』の奥書に「加六（嘉禄）三年五月十九日、以清家本為一校了」とあることからわかる（『田中家文書目録』一、桐八）。

（10）文化庁監修『国宝・重要文化財大全7　書籍上』（一九九八年）、平雅行「将軍九条頼経時代の鎌倉と山門派」（『日本仏教の史的展開』、一九九九年）

（11）前註太田（3）論文より引用。

（12）陳狆氏は、「清直講」を清原隆直に文中の「闔外」を将軍と解釈し、『管見抄』の作者を宗尊親王とする見解を示された（「『管見抄白氏文集』の成立と金沢文庫の創設背景」、二〇一一年一一月五日、国立歴史民俗博物館共同研究会研究報告）。本稿では同日に発表した自身の報告をまとめておいた。

（13）北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』（二〇〇一年）

（14）前註（6）西岡論文。

（15）永井晋「金沢北条氏の女性名」（『金沢北条氏の研究』、二〇〇六年）

（16）櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（一九六四年）三八九～三九一頁、納富常天「称名寺の基礎的研究」（『金沢文庫資料の研究』、一九八二年）。

（17）遺身院は聖教奥書では「佐々目御坊」「鎌倉佐々目御坊」の記載が一般的である（貫達人・川副武胤編『鎌倉廃寺事典』、一九八〇年）。

（18）田島光男「西院流伝法灌頂相承血脈鈔について」（『三浦古文化』四〇、一九八六年）。能禅は御史中丞為親の孫で、東寺大悲心院に住した後に宏教の弟子となり関東で付法した（佐和隆研編『密教辞典』、一九七五年）。

（19）遺身院に『白氏文集』の「新楽府」の注釈書『新楽府注』が伝来していたことは太田晶二郎氏の指摘がある（「『百練抄』か『百錬抄』か」『太田晶二郎著作集』第一冊、一九九一年）。大須真福寺文庫本『新楽府注』の奥書を、太田氏の補訂により掲載しておく。

　正嘉元年七月卅日　　於相州鎌倉佐々目谷書了、

遺身院自体は、寛元四（一二四六）年に北条経時が没した後に建てられた供養堂をもととし、宝治元（一二四七）年に守海が招かれて成立した。その後、経時の子頼助が入寺している（櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』、一九六四年）。

（20）（21）貫達人・川副武胤編『鎌倉廃寺事典』（一九八〇年）

（22）湯山学「定豪とその門流」（『鶴岡八幡宮の中世世界』、一九九五年）。なお、鎌倉中期の勝長寿院別当源恵は「日光法印」とも称された（平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇、二〇〇〇年）。

（23）尊澄と鎌倉との関係は、『阿娑縛抄』食法作法の奥書が参考となる（『大日本仏教全書』）

　御本云、
　建長四年三月廿一日、於小河草了、
　一昨日十九日、当院ノ宮宗尊親王令行啓関東給了、
　同六年六月廿九日、於鎌倉書畢、
　今年々月、是前武州刺史禅門十三年忌辰也、
　　求法比丘尊澄

宗尊親王の京都出発の日は『吾妻鏡』と一致、建長六（一二五四）年六月の「前武州刺史禅門十三年忌」は仁治三（一二四二）年六月に没した泰時の忌日と合致している。右のように記した背景には、鎌倉の要人との親密な関係があろう。

（24）尊澄は、建長五（一二五三）年書写の『合行灌頂私記』等でも書写場所を「関東大蔵谷」と記している（宝戒寺所蔵、『神奈川県史　資料編　中世Ⅰ　古代・中世（1）』四二一～四二六）。

（25）「鎌倉における御所の記憶と大門寺」（『中世の都市の力―京・鎌倉と寺社―』、二〇一〇年、二〇〇三年初出）

（26）「解題」（臼井信義執筆、『石清水八幡宮史料叢書』五）

（27）人物の概要は主として北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』（二〇〇一年）

を参照し略記した。

(28) 山崎誠「菅大府卿為長伝小考」(『中世学問史の基底と展開』、一九九三年)

(29) 系譜は『系図纂要』第二冊五九一頁参照。

(30) 篇目は「顕徳院一日一切経　作者資実／同院御逆修　作者同／同結願　作者為長卿／同諷誦文　作者同／為長卿逆修　自作／法性寺殿阿弥陀経　作者為長卿」。本書は水戸徳川家の大日本史編纂に際して写本が作られ『本朝文集』に収録された(『よみがえる中世』〔神奈川県立金沢文庫〕、解説)。

(31) 貫達人・川副武胤編『鎌倉廃寺事典』(一九八〇年)

(32) 拙稿「鎌倉極楽寺真言院長老禅意とその教学」(『金沢北条氏と称名寺』、一九九七年)

(33) 『八幡宮寺年中讃記上中下』には唯心関連の識語がある(『田中家文書目録』一、桐十一)。

「本云、(上冊奥書)　蓮忍上人自筆、志水唯心上人筆、尤可貴重歟、」

「本云、(下冊奥書)　文永十二年乙亥二月十九日、西寺東房ニ書了、

本云、嘉暦二年三月日、誂人所書留也、中志水唯心上人筆、為其門葉、尤可崇重々、蓮忍、応仁元丁亥年十二月日、以志水円満寺住持見昌本写之、小比丘倫誉」

唯心は石清水八幡宮内で崇敬され、その筆跡は後世においても重視された。

(34) 「鎌倉時代の国家機構―薪・大住両荘の争乱を中心に―」(『中世の国家と宗教』、一九七五年)

(35) 文書本文は菊池紳一「財団法人前田育徳会所蔵文書(二)」(『鎌倉遺文研究』二四、二〇〇九)収録の「二六　後嵯峨上皇院宣〇尊経閣古文書纂石清水文書」による。

(36) 伊藤清郎「中世国家と八幡宮放生会」(『中世日本の国家と寺社』、二〇〇〇年、一九七七・八年初出)

(37) 前註(34)黒田論文。

(38) 「石清水八幡宮」(『中世日本の国家と寺社』、二〇〇〇年、一九七六年初出)

(39) 佐久間久子「宗尊親王　鎌倉将軍家就任の歴史的背景」(『政治経済史学』三七〇、一九九七年)

(40) 村井章介「執権政治の変質」(『中世の国家と在地社会』、二〇〇五年、一九八四年初出)

(41) 「楽府」は中国の漢・魏の時代に制作された楽曲で、児童を動員して歌われることもあった(沢口剛雄「解説」『楽府』、一九八七年)。太田晶二郎氏は、源光行が『蒙求和歌』『百詠和歌』『楽府和歌』の三部作を作成したこと、「蒙求」「百詠」「楽府」に白居易の「新楽府」を加えた四部が漢籍教育の基本だった可能性を指摘された(「『四部ノ読書』考」『太田晶二郎著作集』第一冊、一九九一年)。なお、実時は源光行の子親行から『源氏物語』を借覧し書写している。

(42) 「楽府朗詠」の教授に関する文書はほかにもある。朱合点のことを記しており、同じく教清への教授に関わるものだろう(〔『大日本古文書』石清水文書一・六一二頁)。

(43) 前註(8)仁木論文。

(44) 玉井幸助校訂『問はず語り』(岩波文庫)三一頁。『増鏡』「第八　あすか川」にも同様の記述がある。

(45) 「和気氏系図」によると、種成は「侍医、正四位下、兵庫頭、昇殿」、法名は仏種、正応元(一二八八)年九月三〇日に六八歳で没。また別本には「侍医、博士、典薬権頭、兵庫頭、従五位下」とある(以上、『続群書類従』七上)。『民経記』には、正元元(一二五九)年一二月二八日条の行幸の記事に「大内記兼倫　兵庫頭種成(和気)朝臣」、文永五(一二六八)年一〇月五日条の後嵯峨院出家の記事に「医師兵庫頭和気種成朝臣」とみえ法名は「覚種(仏厳)」とある。

(46) 松本光隆「平安鎌倉時代における医書の訓読について」(『国文学攷』八七、一九八〇年)。松本氏所引の奥書は以下のとおりである。

文永元年七月廿三日、於仙洞局書、以累葉当家之証本書写訖、

正四位下行兵庫頭兼安芸介和気朝臣種成(花押)

『一交了』

同九月九日戌終刻、於芝砌移点了、　種成(七行後)

弘安五年七月八日、一見了、(花押)

文化庁監修『国宝・重要文化財大全7　書籍上』には、右の奥書とともに「紙背　種成宛加級消息7通」とある(一九九八年)。

(47) 小出満二「『斉民要術』の異版につきて」(西山武一・熊代幸雄訳『斉民要術』、一九六九年)

(48) 矢島玄亮『日本見在書目録―集証と研究―』(一九八四年)

(49) 文化庁監修『国宝・重要文化財大全7　書籍上』掲載写真による。

(50) 関靖『金沢文庫の研究』(一九五一年)の跋語判断による(四三頁)。

(51) 文化庁監修『国宝・重要文化財大全7　書籍上』は「北条実時が小川僧正(叡山承澄カ)本から書写したもの」と推定し、平雅行氏は「蓬左文庫『斉民要術』は承澄が京都で借り受けて、金沢実時が書写させたもの」と承澄からの伝来本と断定された(前註(10)平論文)。

(52) 前註(47)小出論文。なお、『名古屋市蓬左文庫善本解題図録』第二集の『斉民要術』の解説には、「文中、処々に見える欠字文字に『帝諱の制』を適用してみると、南宋の刻本を底本としたものであることは疑いないが、さて直接に南宋本を踏んだものであるかどうか、ということになると多少問題がある」と記されている(杉原豊治・日原利国両氏の分担執筆、一九六八年初版、一九八〇年再版)。

(53) 「台密血脈譜裏書の尊意・平澄・明救説話―恵尋・快雅・慈胤の考察―」(〔比

叡山仏教説話研究―序説―』、二〇〇三年）。天台僧が鎌倉の律僧と密接な関係にあったことは、光宗の『渓嵐拾葉集』に極楽寺忍性が如意宝珠をめぐって江ノ島の龍穴に参籠する説話や称名寺長老釼阿との問答が収録されていることからもわかる（田中貴子「『渓嵐拾葉集』にみる情報収集の諸相」『『渓嵐拾葉集』の世界』、二〇〇三年）。

(54) 前註（10）平論文。

(55) 島地大等『天台教学史』（隆文館版、一九七七年）四一五頁。佐和隆研編『密教辞典』（一九八五年）。「小川僧正」を承澄に比定する理由は、「三国明匠略記」に承澄を「小川僧正」とし、弘安五（一二八二）年一〇月二二日に七八歳で没したという記載等を根拠とした（『大正新修大蔵経』図像第九巻、九四六頁）。なお、『遮那業学則』には「穴太聖昭ノ資、契中、忠快・承澄・澄豪ト伝来シテ」とある（『大正新修大蔵経』第七七巻二七八頁）。承澄の師匠忠快は平教盛の子で（『尊卑分脈』）、『吾妻鏡』に「小川忠快法印」と度々登場している（建暦元年一一月二日条他）。

(56) 貫達人・川副武胤編『鎌倉廃寺事典』（一九八〇年）二四四頁。

(57) 『大日本仏教全書』第三九・四〇巻にも同様にみえる。ただし、『大正新修大蔵経』の翻刻の方がより正確と判断し、後者から引用した。

(58) 承澄による『阿娑縛抄』の著述は建長年間に始まり、文永一一（一二七四）年・弘安四（一二八一）年の識語もある。このことから「晩年に至るまで補修に従事していたとされている（望月信亨『望月仏教大辞典』、一九三三年）。

(59) 「近衛宰子論―宗尊親王御息所としての立場から―」（『紫苑』九、二〇一一年）

(60) 『斉民要術』は広く学ばれている。中世前期の寒冷な気候の中（磯貝富士男『中世の農業と気候』、二〇〇二年）、中国北部の畑作農法への関心もあったろうか。

(61) 菊池大樹氏は、宗尊親王が式乾門院や室町院の猶子となったことや親王のまま将軍として関東に下向したことを後嵯峨院の強力な意思および王統としての必須条件だったと指摘された（「宗尊親王の王統と大覚寺統の諸段階」『歴史学研究』七四七、二〇〇一年）。

(62) 前田元重「武家の文化」（『神奈川県史　各論編　3　文化』、一九八〇年）。前田氏の分析は①③④の問題を中心に特に貞顕について分析している。

(63) 北条実時と石清水八幡宮の関係は、北条時輔領であった出雲国横田荘に関わる石清水八幡宮と時輔の母との相論にもみられる。文永一〇（一二七三）年一〇月、石清水八幡宮検校宮清は引付頭人実時に石清水八幡宮雑掌祐範申状案を送付しており、申状案は実時本『斉民要術』の紙背文書に含まれている（杉山巌「光厳院政の展開と出雲国横田荘―東京大学史料編纂所所蔵『出雲岩屋寺文書』を中心に―」『東京大学史料編纂所研究紀要』一六、二〇〇六年）。

(64) 漢籍研究の重要さは公武共通して使われた「撫民」の単語にもうかがえる。太田青丘氏は「撫民」は「貞観正要のこの理国並びに撫養蒼生にヒントを得て、之を日本流に翻案したものではあるまいか」と述べている（「中世前期歌学と中国詩学」『日本歌学と中国詩学』、一九六八年）。

(65) こうした研究には、高島哲彦「鎌倉時代の貴族の一側面―『関東祇候廷臣』についての一考察―」（『史友』一九、一九八七年）、永井晋「中原師員と清原教隆」（『金沢北条氏の研究』、二〇〇六年、一九八八年初出）、同「平安・鎌倉時代の南家儒流」（『栃木史学』九、一九九五年）等がある。この他、後嵯峨院・宗尊親王周辺人物の北条氏との密接な関係は、葉室光俊とその子の天台僧定円の関係でもみられる。葉室光俊は宗尊親王の歌道師範として鎌倉に下向すると、定円もまた下向して時頼の法華八講や泰時の十三回忌供養をつとめた。晩年の徳治三（一三〇八）年には六波羅邸で金沢顕時の八回忌供養を行っている（近本謙介「『和州橘寺勧進帳』解題・翻刻」『仁和寺資料』第三集、二〇〇二年）。恐らく、実時らとの関係が孫の貞顕まで引き継がれたのだろう。なお、葉室光俊と北条氏との関係については、小森正明「葉室光俊の鹿島社参詣について―『夫木和歌集』にみえる詠草を中心に―」（『茨城県史研究』九三、二〇〇九年）等がある。

（二〇一二年一月一〇日受付、二〇一二年五月二五日審査終了）

（愛知学院大学文学部）

Group of Recipients of Chinese Classics in Kyoto and Kamakura in the Mid Kamakura Period : Between Kankensho and Kyureishu

FUKUSHIMA Kaneharu

Concerning the reception of Chinese classics by high officials of the Kamakura Bakufu (shogunate), studies have been conducted on subjects such as the Chinese classic-oriented personalities of Hojo Tokiyori and Sanetoki, their relationships with Confucian scholars such as the Kiyohara clan or Fujiwara Nanke, and the formation of "Buke-bunko" (samurai family's library); however, sufficient study has not been conducted from the perspective of the Court-Bakufu relations during the Kamakura era. In this paper, Kankensho, which is believed to be an anthology by Sanetoki, through Kyureishu (collection of Chinese poems and proses) edited by Ryosei of Iwashimizu Hachimangu, are studied, and it has been clarified that there was a common group of recipients of Chinese classics in Kamakura and Kyoto.

Kankensho consists of excerpts of key passages from Hakushi Monju, which was transcribed in Einin 3 (1295) in "Kanto Tanaka-bo". This paper focuses on examples in which "Kanto" was affixed to the names of monks' living quarters in temples. As a result, it became clear that Ishin-in had the characteristics of the Kamakura priest's lodge of Kyoto Shimogawara Monzeki, Inukake-bo had the characteristics of the Kamakura priest's lodge of the Nikko-zan betto (chief priest), and Okura had the characteristics of the Kamakura priest's lodge of Ogawa-bo. It has also been discovered that, in many cases, places with names to which "Kanto" is affixed were often Kamakura lodges of persons who were based in places other than Kamakura. Based on these facts, it is possible that Tanaka-bo was a Kamakura priest's lodge of Iwashimizu Hachimangu.

Concerning the relationship between Iwashimizu Hachimangu and Kamakura, the close relationship between Betto Sosei and Rokuhara Tandai (the Kamakura shogunate's Kyoto agent) Hojo Shigetoki is known; however, no attention has been given to Kyureishu. Kyureishu contains items such as veneration pledges by Hojo Tokiyori and was authored by Sugawara no Tamenaga, Fujiwara no Tsunenori and others who (or whose descendants) had a close relationship with Kamakura. The interaction between Kamakura and Kyoto was mediated by the people appearing in Kyureishu. One notable example is Seimin-yojutsu, copied at the order of Hojo Sanetoki. Its copy text was the copy made by Wake no Tanenari, and Kyureishu contains Chinese poems by Tanenari as well. Tanenari was a court physician of Gosaga-in and a member of a social society held by Ryosei, together with Fujiwara

no Akionori and others. It seems that the collection in this book by Sanetoki had something to do with his duty as Kosamurai dokoro betto. This is inferable from the fact that he performed revision of the book based on the copy by Shocho, who authored Asabasho, or the copy by Konoe Iemoto, a nephew of Prince Munetaka's official wife Saishi. The human network observed in Kyureishu is strongly visible in the introduction of Seimin-yojutsu. It can be said that the stable Court-Bakufu relationship formed through Gosaga-in and his son Prince Munetaka created the common foundation for the transmission and receipt of Chinese classics in Kyoto and Kamakura.

Keywords: Kankensho, Kyureishu, Iwashimizu Hachimangu, Kanazawa Bunko, Gosaga-in